

Beyond 2018 Japan-Sweden International Collaboration Symposium

Preschool education with sustainability perspectives

「どのようにして持続可能な視点を取り入れた就学前教育を実践することができるのか」

西浦和樹¹
池田和浩²
川崎一彦³
天童睦子¹
足立智昭¹
丹野久美子¹
本間義規¹

国際ワークショップ・シンポジウムに寄せて



Beyond 2018 Coordinator

Kazuki Nishiura

西浦和樹（宮城学院女子大学・教育学部・教授）

スウェーデンの学校教育は、1歳から5歳までの就学前教育（プリスクール）、6歳のプリスクールクラス、7-16歳の小・中学校（1年生から9年生）、16-19歳の高等学校、大学、大学院教育が行われています。

子育て環境は、子どもの権利が保障されるように手厚くなっています。教育費は無料、父親も母親も育児休暇が義務付けられている両親休暇は480日（その間、給与の80%保障、よって0歳児は家庭で育児）、医療費は18歳以下が無料となつ

ており、子育てに関して経済的負担がかからない仕組みとなっております。

スウェーデンの幼児教育は、2019年6月から新しい教育カリキュラムがスタートし、幼児教育が生涯教育の基礎として明記されました。教育内容については、「アウトドア教育」のような特色ある教育、例えば、幼児期の科学教育（STEM教育：Science, Technology, Engineering, Mathematics）が実践されています。また北欧ではチャレンジ精神や自己肯定感を高める「起業家精神教育」というモチベーション教育の手法が取り入れられ、自ら学び、課題を自己解決することのできる人材の育成につながっています。

今回の国際シンポジウムでは、私立大学研究ブランディング事業の核となる「地域子ども学」について、持続可能な視点から就学前教育の現状と課題について議論し日瑞共通の教育プラットフォーム開発の可能性を探りました。

謝辞 本研究は、文部科学省選定2018～2020年度 私立大学研究ブランディング事業「東日本大震災を契機とする〈地域子ども学〉の構築～子どもの視点に立ったコミュニティ研究の拠点形成～」の共同研究として実施しました。

また、地域子ども学研究センター推進員の相田史織さん、および宮城学院関係者の皆様には、多くの点でご支援とご協力をいただきました。ここに感謝いたします。

-
1. 宮城学院女子大学
 2. 尚絅学院大学
 3. 東海大学

本事業プロジェクト・リーダー 天童睦子
(宮城学院女子大学・一般教育部・教授)



宮城学院女子大学は、2018-2020年度文部科学省私立大学研究ブランディング事業に採択されました。本学は、生きる学びの基盤となるリベラルアーツ教育と、子どもに寄り添う保育・教育学、および食育、住居学等の生活科学の融合により、教養ある自立した女性市民を長年にわたり輩出してきました。教養と実学の融合は「教養ある生活者」としての女性の育成という、本学ならではの強みといえましょう。

東日本大震災以降、地域社会の復興は今なお道半ばであり、なかでもハード面の復興の陰で、子ども・子育てにかかわる諸問題が喫緊の課題となっています。そこで本事業では、学術研究と教育実践の場としての大学の強みを最大限に生かし、震災の当事者性と専門性から新たなプロジェクトを共創するためのプラットフォーム地域子ども学研究センターを立ち上げました。

地域子ども学研究センター運営代表 足立智昭
(宮城学院女子大学・教育学部・教授)



地域子ども学研究センターは、地域の担い手とともに、子どもの「学び」、「食」、「居場所」を最重要課題とするまちづくり・コミュニティ形成を目指す研究と実践学の拠点です。地域子ども学とは、本プロジェクトの議論から生まれた新たな概念です。子どもの視点、子どもの主体性を重視し、地域の担い手とともに「子どもの育ちを尊ぶ」まちづくり・コミュニティ形成を目指します。ここで重視する「子どもの視点」とは、当事者としての子どものニーズを分析し、子どもの声に寄り添う視点です。壮大な社会的事業としてのまちづくり・コミュニティのあり方の検討に、生活者である市民、未来の担い手として子どもたちが自発的にかかわる未来志向的プロジェクトを指しています。ぜひともに子どもの豊かなコミュニティを築き上げていきましょう。

プロジェクト運営委員

丹野久美子 (生活科学部・食品栄養学科・准教授)

本間 義規 (生活科学部・生活文化デザイン学科・教授)

協力

池田 和浩 (尚綱学院大学・准教授)

川崎 一彦 (東海大学・名誉教授)

＜地域子ども学＞と持続可能性の視点
 第一部 日本-スウェーデン国際ワークショップ
 「北欧スウェーデン発 心を育てるアウトドア教育とその手法」

日時：2019年10月3日（木）13:20～14:20



講師：Carina Brage カリーナ・ブレイジ
 （リンショーピング市小学校校長）

『科学する心を育てるアウトドア活動事例集』著者、アウトドア教育の専門家

Principal in primary school of Linköping municipality, author, master in outdoor education

Title: Teaching technology outdoors – when, why and how – we do lessons outdoors in Sweden.

Abstract: Research shows that outdoor education with regular physical activities and contact with nature can have positive and meaningful effects, both directly and indirectly, on learning, academic performance, health and wellbeing. I have been working with learning outdoors as teacher, trainer - both for different municipalities in Sweden and by my own company and as a principal for over thirty years and I have only positive experiences with me. The children learn with the whole body and understand better when we use our senses and experience - in the play, in both the spontaneous and planned teaching at the preschool/primary school.

The preschool curriculum thus gives support to integration of outdoor activities into daily pedagogi-

cal activities, so that outdoor activities, according to the preschool's mission, may constitute a component in play and learning. Collaboration, discovering and experiencing together become more apparent when we leave the room indoors.

I will give examples of activities for a learning that is relevant and sustainable on my workshop.

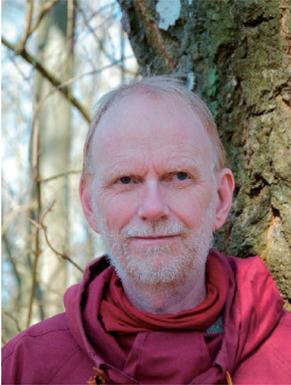
Research proves that children's health, motivation and creativity are positively influenced by daily and regular stay in green natural and cultural landscapes. This fact should, in the context of preschool and school, be regarded as an essential component in children's learning, their personal and social development and their health.

タイトル：『科学する心を育てるアウトドア活動』-いつ、なぜ、どのように、スウェーデンではアウトドア教育を行うか

要旨：定期的に体を動かして自然と触れ合うアウトドア教育は、直接的、間接的に学習や学業成績、健康、ウェルビーイングにプラスの効果をもたらすという研究結果があります。著者は30年以上にわたり、スウェーデンのさまざまな市町村や会社で、校長として、また教師、トレーナーとしてアウトドア教育に取り組みました。就学前教育/小学校での自発的・計画的指導における遊びのなかで、子どもたちは、全身を使って学ぶことでより理解することを、私たちは感覚と経験を通して知っています。就学前教育のカリキュラムは、アウトドア活動と日常的な教育活動の統合を支援し、幼児教育のミッションにそって、遊びと学習からなるアウトドア活動を構成します。室内を離れると、コラボレーション、発見、体験が一緒になり、よりはっきりともたらされるのです。著者のワークショップでは、関連性のある持続可能な学習のための活動例をご紹介します。

調査によると、子どもたちの健康、やる気、創

造性は、緑豊かな自然や文化的景観に、日常的、定期的に触れることによってプラスの影響を受けます。この事実は、就学前教育/小学校教育の文脈において、子どもの学習、人格的・社会的発達、および健康の本質的要素を示すものといえましょう。



講師：Ingemar Nyman イングマル・ニーマン
(ヘルシングボリ市環境工房インストラクター)

ヘルシングボリ市の持続可能な都市計画部門にて勤務。環境教育学の開発と教育担当。彼はアウトドア教育の達人であり、スウェーデンの小学校で工芸と生物学の教師を経験。著書に工芸と環境教育を記載した2冊の本がある。

Title: Helsingborg Environmental Studio
Initiatives

Abstract: At the department of sustainable urban planning in Helsingborg we create a new meeting place - Habiteum. The ideas about Habiteum are based on 30 years of experience in communication with schools and the general public about sustainable development.

The umbrella for our activities is found in the UN's 17 global goals and the city's quality of life program. We use outdoor education as a tool to clarify and specify. Three things are in focus: Nature contact, Workshop and Competence for action

Competence for action emphasizes that what we

communicate will have an impact. We want to promote change in people both in their roles as individuals but also as professionals.

Nature contact is the starting point in our way of working. Without nature we are nothing. In everything we do, we want there to be contact with nature. Therefore, the whole human being, preferably with all their senses, is activated in our themes and programs.

In the workshops we meet in creativity as we cook, prepare and utilize together. The workshop reflects our will and confidence in people's development. When we meet people in creative processes, we believe in increased commitment. An example of creative meetings is our food workshops.

タイトル：ヘルシングボリ環境工房の取り組み

要旨：ヘルシングボリの持続可能な都市計画部門では、新しい集いの場-Habiteumをつくりました。Habiteumの取り組みは、持続可能な開発に関する学校や一般の人々とのコミュニケーションにおける30年の経験に基づいています。

この活動全体は、国連の17のグローバル到達目標とヘルシングボリ市の「生活の質」プログラムによるものです。アウトドア教育は、これらのプログラムを明確化し特定するためのツールとして用いられています。この取り組みではとくに次の3つが重要です。すなわち自然との触れ合い、ワークショップ、行動する力です。

行動する力は、コミュニケーションが影響を与えることを強調しておきます。私たちは、個人として、また専門家としての双方の役割において、人々の変化を促したいと考えています。

自然との触れ合いは、私たちの活動の原点です。自然がなければ私たちは存在しません。人が行うすべてのことにおいて、人間はそこに自然との触れ合いを望んでいます。したがって人はみな、自らの感覚に沿えば、私たちの掲げるテーマとプログラムにおいて活性化されるのです。

ワークショップでは、一緒に料理したり、準備

したり、活用しながら創造性を伸ばしていきます。ワークショップは、人々の発展に対する私たちの意志と自信を反映しています。創造的なプロセスのなかで人々が出会うとき、かかわり合いが高まります。その好例が食のワークショップです。



Kazuhiko Kawasaki 川崎一彦
(Professor Emeritus, Tokai University)

川崎一彦 (東海大学名誉教授)

1947年滋賀県生まれ。北海道東海大学教授、東海大学教授を経て2013年から東海大学名誉教授、スウェーデン・ストックホルム在住。日本国外務大臣表彰 (2018)、スウェーデン王国北極星勲章 (2019)

『みんなの教育：スウェーデンの人を育てる国家戦略』第一章 (2018、ミツイパブリッシング)、〈新北方圏戦略〉登板の時代 (2019、HOPPOKEN) など

Title : Education for all: Swedish Entrepreneurship Education as National Strategy

タイトル 「みんなの教育：スウェーデンの人を育てる国家戦略—スウェーデンの起業家精神教育」

Abstract : 北欧では起業家精神を「アイデアを行動に翻訳する個人の能力」と定義しています。これは、創造性を発揮してユニークなアイデアを生み出し、さらに単なるアイデアで終わらせずに行動に移す、という二面の能力を要求しているのです。” 内的” 起業家精神は、起業するしないに拘

わらず、大企業に勤める人にも、公務員にも必要な資質と位置付けられ、就学前から起業家精神教育を導入してきました。知業時代の基本的教育哲学と言えるでしょう。

Visitors from Sweden and my colleagues

スウェーデンからのゲスト



Victoria Larsson (Principal in Helsingborg city schools, Sweden)

ビクトリア・ラーソン (スウェーデン、ヘルシングボリ市立就学前学校校長)

Profile: Principal of three preschools in Helsingborg; Råå – Högasten and Lussebäcken with 200 children between 1-5 years old and 45 employees.

Lecturer about working as a principal. Preschool teacher for a long time.

Victoria is part of the planning group and receive teacher during internships from Shizuoka at their preschools.

ヘルシングボリの3つの就学前学校の校長。Råå-へガステンとリュッセバッケンには、45人の教職員と1~5歳の200人の子どもがいる。校長としての働き方の講師。就学前学校の教員として長期にわたって勤務。計画グループの一員であり、静岡からのインターンシップの教員を受け入れてきた。



Monica Andersson (Language, read and writer developers in Pedagogiskt center.)

モニカ・アンダーソン（ヘルシングボリ市教育センターの言語教育の専門家）

Language, read and writer developers in Pedagogiskt center. Teacher in Swedish as a second language. Monica is a part of the language team at Pedagogiskt center. The team support the educators in working with the children around the Swedish language and other native language than Swedish.

Educator for pedagogues in curriculum of pre-school and preschool class.

Monica is part of the planning group and organizes planning programs in the cooperation between Helsingborg city schools and Shizuoka Private Kindergarten Association.

Preschool teacher as a long time.

教育センターの言語教育、読み書き能力の開発者。第二言語としてのスウェーデン語の教師。ヘルシングボリ市教育センターの言語チームの一員で、スウェーデン語、およびスウェーデン語以外を母語とする子どもたちの教育者を支援。就学前教育のカリキュラム、および就学前クラスの教授法にも詳しい。ヘルシングボリ市立学校と静岡私立幼稚園協会との協力計画プログラムにも関わる。就学前学校の教員として長年の経験を持つ。



Inga Nilsson インガ・ニルソン（ソーシャルワーカー）

Inga Nilsson is a trained social worker with further education in family therapy. As a pensioner, I am now active as a volunteer in various assignments for the Municipality of Helsingborg. First and foremost, I attend a language café for immigrant women.

インガ・ニルソン：ソーシャルワーカー、家族療法に詳しい。年金受給者。現在ヘルシングボリ市のさまざまなボランティアとして活動。とくに移民女性のための語学カフェに尽力している。

＜地域子ども学＞と持続可能性の視点 第二部 日本—スウェーデン国際シンポジウム

「どのようにして持続可能な視点を取り入れた就学前教育を実践することができるのか」

日時：2019年10月3日（木）14:30～16:10

講師：Carina Wällstedt Johansson カリーナ・ヴェルステッド・ヨハンソン氏（ヘルシンボリ教育センター・ペタゴジスタ）



ヘルシンボリ市教育センターのペダゴジスタ。教育センターは、ヘルシンボリ市の学校スタッフを総括し、学習と開発を行う。就学前教育のカリキュラムにおける教員のための教育者。「みんなの自然と技術」(NTA)で経済団体と連携。1986年以来、就学前教育の教師として経歴を積み、副校長も経験。スウェーデンの「レッジョ・エミリア研究所」理事。ヘルシンボリ市立学校と静岡私立幼稚園協会との連携にも尽力し、プログラムを編成した。

通訳：川崎一彦氏（東海大学名誉教授）

司会・進行：西浦和樹（宮城学院女子大学教授）

（原文は日本語訳の後に掲載。講演会のSlideを掲載。）

Slide 3：スウェーデンの就学前学校の指導要領（2018年版）



2018年に改訂されたスウェーデンの就学前学校の保育要領には、就学前学校は持続可能な開発に貢献し、子どもたちは日常生活の選択で持続可能な開発に影響を与えることができることを学ぶべき、と明記されています。2020年1月1日には国連の子どもの権利条約はスウェーデンでは法律になります。子どもたちには、自分たちの未来に関する課題に参加する権利があります。子ども時代に、子どもがどのような態度や行動を学ぶかは、人類がより良い世界をつくることに影響を与えるので、重要です。

就学前学校の保育要領には

就学前学校は国連の子どもの権利条約で表明されている価値観や権利を反映すべきです。就学前教育は子どもたちの最善の利益であると考えられるものを目指し、子どもたちには参加し影響を受ける権利があります。したがって、子どもたちは自分たちの権利を知るべきなのです。

持続可能な開発、健康と幸せ

教育は未来が明るいことを感じとれるように配慮すべきです。さらに教育は、自分の周りの環境、

自然、社会に対して生態学的に優しい生き方を実践するアプローチを提供すべきです。一方、子どもたちは自分たちの選択により、経済的、社会的、生態学的に持続可能な開発にどのように貢献できるかについての知識も得るべきです。

Slide 4 : 持続可能な開発は現在のニーズだけでなく、これからの世代のニーズも充足させる必要がある

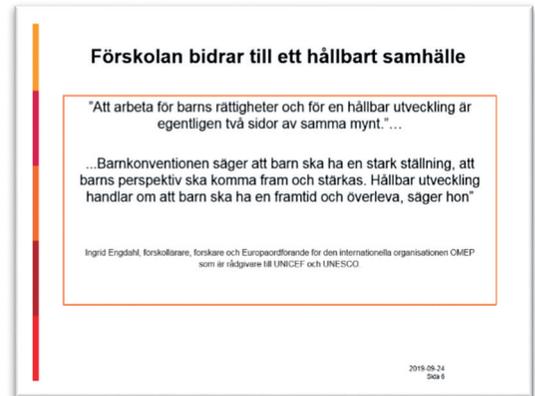


Slide 5 : SDGsの開発目標



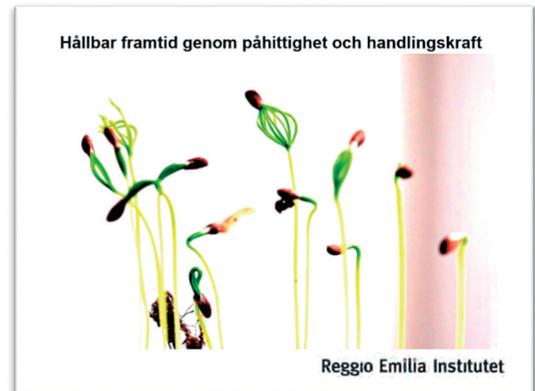
国連は2030年までに到達すべき17のグローバルな持続可能な開発目標 (SDGs) を採択しました。そこには、健康、教育の機会、社会福祉、移民、気候変動、社会のパートナーシップなどが含まれます。これらの目標は就学前学校の保育要領に記載されています。

Slide 6 : 就学前学校の持続可能な社会への貢献



ストックホルム大学のイングリッド・エンゲダール博士は、大人は子どもたちに行動スキルを身につける機会を与えるべきである、と唱えます。就学前学校の教師は日常生活において変化が起せる可能性を示すことが大切です。

Slide 7 : 発見と行動による持続可能な未来



スウェーデンの就学前学校の保育要領には、民主主義、関係性と学習状況が重要である、と明記されています。これはスウェーデンのレッジョ・エミリア協会が2016年にスタートさせた持続可能な未来プロジェクトでも重視されているポイントです。

このプロジェクトでは、生態学的、社会的、経済的な持続可能性について協働し、創造的に学ぶことも大切なポイントです。ここでは自然のすべてに共感し、関係性を見つけ、新しいものを作り

出す人間の「生態学的な感受性」が重要になります。ここでは、人間は自然の一部という考え方に立ちます。生態学的な感受性は、イタリアのレッジョ・エミリアのプリスクールで使われているコンセプトです。

スウェーデンでは、多くの就学前学校の教師が持続可能性について関心をもっており、子どもたちとネットワークを作って活動しています。2016-19年には約2000人の教師がこのネットワークに参加しています。

Slide 8: キーワード（行動力、不思議、未来への信頼）



ステファン・エドマン氏（生物学者、作家）によれば、不思議なことがすべての始まりで、あなたの好奇心をくすぐり、もっと知りたい、学びたいという気持ちにさせるのです。

Slide 9: 世界は生態学的な感受性と持続可能な思考を必要としている（なぜと問うこと）



レッジョ・エミリアは持続可能な未来プロジェクトで、就学前学校、そして学校が持続可能性の問題について扱い、希望、発見、行動にあふれ、子どもや若者の仮説、探索と行動が重視される教育の場となることを目指しています。

具体的な手法としては、聞くこと、探索すること、ゆとりがあることが大切にされます。そして、意志と意欲を伴う行動が奨励される中で、人間の責任感を養い、未来への信念を得て、その信念を拓けるのです。

ヘルシングボリ市の学校は様々な形で持続可能な開発教育に取り組んでいます。その中から、次に「スマート食」プロジェクトをご紹介します。

Slide 10 : 未来について新しい考え、アイデアを作るための教育と教育者は楽観的でなければならない



Slide 11 : 持続可能な開発目標：発見と行動による持続可能な未来



「発見と行動による持続可能な未来」をキャッチフレーズとし、次の三つの重点分野（健康・ウェルビーイングと持続可能性、自然と持続可能性、社会の持続可能性）で地域ネットワークをサポートし、ネットワーク内で文書や情報を探すことができるようにしています。

持続可能な未来プロジェクト

- ・全国、または地域のネットワークで持続可能な未来に関する対話の場および対話の前提条件を作り出す。
- ・持続可能な未来についての新しい情報を国際的、

国内的、そして地域的に広め、共有する。

- ・持続可能な未来のために、イノベティブなアイデアや行動について学び、挑戦しながら、社会の他のステークホルダーと一緒に協力する。
- ・三つの重点分野について、就学前学校や学校において、持続可能な戦略思考プロセスを特定し、進展させる。

Slide12 : 発見と探索に必要なこと

私たちは立ち止まって自分自身に挑戦する必要があり、子どもたちと一緒に環境、教材、そしてお互いに密接な関係を築く必要があります。子どもたちの発見や探索は、ゆっくりと、繰り返し、時間をかけ、自分たちのペースで進める必要があります。

ここではプリスクールのエンマ先生の農園で子どもたちがミミズを見つけます。

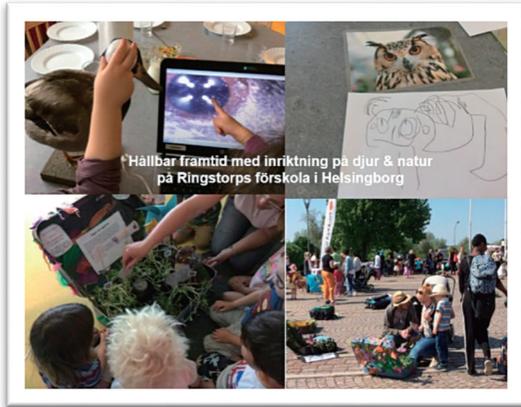
Slide 13 : 自然を探索する



ルッセベッケン・プリスクール（Lussebäckens förskola）は移民難民が多く、子どもの母国語もたくさんあります。次の映像は、最初の二ヶ月にお互いにどのように知り合っていくかがわかるものです。

子どもたちは必ずしも言葉だけでお互いを理解するとは限りません。時には様々な表現や審美的な言葉を使って、子どもたちも教師も一緒に学び始めます。

Slide 14: 動物と自然に注目した持続可能な未来に関するリングストーブ・プリスクール (Ringstorps förskola) の実践



マルメ大学のスベン・パーション教授によれば、拡張的学習により知識を別の状況に転移することができます。子どもたちにとっては技術を使ったり、社会的な協働にも応用できます。

夏に見た鳥の写真を持ってくる、という課題プロジェクトが始まります。子どもたちが外を散歩するだけで、自分たちが見たり聞いたりしたことのある鳥を発見することができます。

ある日、鳥のさえずりを聞いたとします。ツバメかもしれませんが、わからないのでKvitterというアプリで確認します。アプリでツバメの鳴き声を再生すると、聞き覚えのある鳥の声のように思えます。アプリを閉じてまた歩き始めると本物のツバメも鳴き止みます。またアプリで鳴き声を再生するとツバメも一緒に鳴きます。ツバメは私たちの頭上の木に飛んできます。木曜には園庭で同じようにしてツバメに出会います。近づいてくので様子がよく分かります。デジタル機器のおかげで、鳥をより詳しく検索することができます。子どもたちのツバメへの関心が高まります。ツバメの巣からライブ映像が見られるようにしました。メスが7つの卵を温め、ひな鳥が生まれ、餌をもらって育ち、やがて巣立っていく様子がフォローできました。子どもたちの思いや経験が確かなものになりました。

プリスクールの公開イベントの日は、一年間に活動したことをバッグに詰め、地域の広場に展示して公開します。バッグの中には年間のプロジェクト、創作、栽培、QRコード、小鳥、物語などが入っています。

Slide 15: 持続可能な未来に向けた子どもたちの権利



セントヨルゲンの4つのプリスクールにおいて、2018年の共通のテーマは「持続可能な未来に向けた子どもたちの権利(未来世代の権利)」でした。ここにその一部をご紹介します。エンマ先生 (Emma Lewis)、マリー先生 (Marie Winck)、それからフリッパ先生 (Filippa Hallengren) が、ニカンデル・プリスクールの1-3歳児、および5歳児のクラスの16人と一緒に農園を舞台に持続可能な未来について学びました。

持続可能な未来では、年間を通して農園をフォローします。木に登ることを学び、ミミズを掘り起こしたり足の下草について知ることができます。様々な形で持続可能な未来のために、しかし全ての生き物を尊重する心を育てることが重要です。

Slide 16 : 「水」に近い海岸での活動



最初に子どもたちが関心をもつのは水です。なぜかは分かりませんが事実です。水遊びが楽しいからでしょうか？最年少の子どもたちにとってはこのような形で水と出会うのは初めてでしょう。

そこで水に近い海岸に行くことにしました。毎週一回、皆が海岸に行って、小グループに別れて活動します。しかし小グループでの活動は容易ではありませんでした。海岸で貝や海藻に興味がある子どもがいる一方、別の子どもは丘の方に登って行きたがったのです。ヘルシンボリ市は起伏が多くあり、プリスクールまでの帰り道は遠く、子どもたちははくたくたになって、お腹をすかせて戻りました。

Slide 17 : 活動の着眼点

子どもたちの持続可能な未来への権利というテーマを扱う際に、海岸は興味深いのですが、他の場所も活用しました。エンマ先生の農園です。

「一年間、自分の農園をたどってみたらおもしろそう」という発想から、子どもたちは植物、動物、昆虫などを見つけ、生態系と人間の自然への影響を理解します。また、特に年配の方とも出会う機会になります。ほとんどの子どもたちはマンションに住んでいます。最初は少し遠いかと心配しましたが、取り越し苦労でした。プリスクールの道中に坂はありません。農園はこのように活用しました。

Slide 18 : 農園への初めての訪問

農園への初めての訪問は刺激的です。子どもたち全員が様々な形で探索し始めました。周りを歩いたり、見たり、小屋に出入りしたり、土を掘ってミミズを探したり。花や大きな根は園に持ち帰って調べました。色々な花の球根も植えました。子どもたちは「マリー先生、この球根は今植えられるの？」と聞いてきました。

ミミズ探しはほとんどの子どもが関心を持ちました。おもしろいだけでなく、同時に少し気持ちが悪いのです。

小屋にも興味を示しました。小屋の中では小話をしたり、農園や近くの場所を探索するのに使えます。

Slide 19 : 花、紙、ペンとの出会い



Slide 20 : ミミズの木

子どもたちがミミズを掘り出し、一人の子がミミズをリンゴの木に持っていき「ミミズの木だ」といいました。これ以降、この木はいつもミミズの木と呼ばれるようになりました。

教師は子どもたちの好奇心、挑戦しようとする意欲を見ながら、プロジェクトを展開します。教師は、海岸から離れて、農園を選択します。親も積極的に応援してくれます。

Slide 21 : 農園の途中で



農園の途中で、子どもたちは大きな発見をします。

「お城だ！」

「パパと来たことがある！」

毎回、農園に戻る途中、ここに立ち寄ります。お城に住んでいるのは誰か、なぜドアを開けないのか、などと空想する場所です。階段や坂を上ったり、下ったりもしてみます。

Slide 22 : 農園をデジタル機器で訪問する



農園に二、三回訪問した後、いくつかの言葉と様々な振り返りの方法を学びます。最年長の子どもに、道中の様子をiPadで動画撮影してもらいました。動画があればいつでもそれを見て農園に行った気分になれるからです。冬が近づいてきました。

Slide 23 : 凍り付いた土



農園に着いてみると、土が凍っており、「ミミズはどうなっているの？」

「パパやママのところに上がってこれない！」

と子どもたちは心配します。

Slide 24, 25, 26 : デジタル機器ですぐに農園に行けます。あなたもエンマ先生と一緒にいきたいですか

私たちは、グリーンのスクリーンを用意して、最年長の子どもたちが農園に向かう途中で撮影した動画を使って考えます。情報機器を使って、子どもたちは空想しながら、小グループで農園に出かけます。子どもたちは部屋の中で、プロジェクター、iPad、緑の布を使って、お互いを観察します。

Slide 26 : 農園は何が楽しいですか

3人の子どもたちがミミズの木に登りたがっています。椅子を取り出し、家具に緑の布をかけて木登りを始めます。

Slide 27: 好奇心は教師向けではなく子ども向け



世界は変化しているので、私たちも変わる必要があります。就学前学校でもデジタル機器を使って調べる必要があります。デジタル機器をどう使うかは決まっていません。デジタル機器導入に前向きな教師と出会うことも、子どもたちの持続可能な未来に向けた子どもたちの権利なのです。

Slide 28: 自然に思いつく



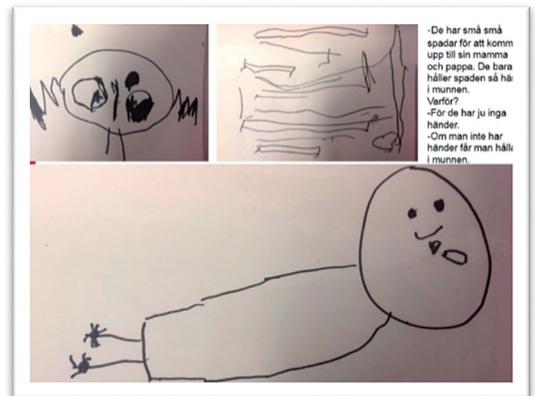
特に寒い冬なので鳥に餌を与えることも自然に思いつきます。

Slide 29: ミミズの穴



寒さの中で子どもたちはミミズを助けます。

Slide 30, 31: 寒い季節には



寒い季節になりました。二週間ほどは農園に行くことができませんでした。子どもたちは小鳥が心配でした。Ingerid Kuitertという芸術家がアウトドアの美術館に8つの鳥の巣箱を作ったら就学前学校の子どもが関心をもった、という話を思い出し、フリッパ先生とマリー先生に相談します。子どもたちが巣箱をデザインします。

「鳥は服を着ません。巣箱に住んでいます。」

「エンマ先生、巣箱を作ろうか？」

「出入りする入口が要るよ。」

「鳥は黒いので巣箱も黒にしよう。」

「暗くなると鳥にも電灯が必要です。」

「これが天井です。」

「巣箱に少し食べ物も要るね。」

Slide 32: 鳥の巣箱

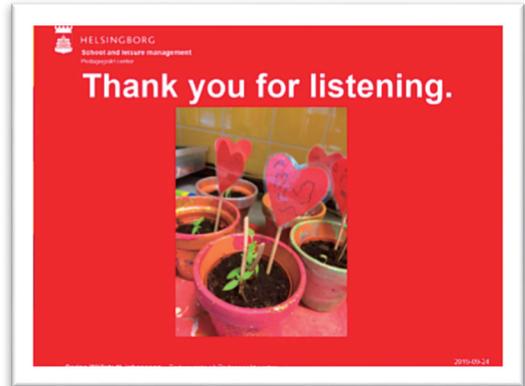


鳥の巣箱が置かれて、鳥が入ってくるのを待ちました。餌箱は人気でした。鳥がミミズを取りにきました。花や野菜を植える時期になりました。鳥も驚かなくなってきました。夏に入る前に、家族ができるでしょう。

Slide 33: ヘルシンボリ市のスマート食プロジェクト (<https://youtu.be/WXuIVaPxcw>)

スマート食プロジェクトでは、給食の残食を減らし、野菜の食事を増やそうとしています。食事も教育の一部と考えます。

Slide 34:



先ほど登壇された環境工房のインゲマル・ニーマン先生などもスマート食プロジェクトに関わっています。自然の中で子どもと一緒に食事の用意をします。就学前学校もこのプロジェクトに参加しており、ハミルトン・プリスクールのミアナ・ヴロヴィックさんの動画をご覧ください。

以上

Part 2: Japan-Sweden International Symposium (Original Paper)

Child-centered Community Studies with Sustainability Perspectives.

Open Lecture: Hållbar framtid genom påhittighet och handlingskraft.

Date: October 3, 2019 14:30 ~ 16:10

Place: Miyagi Gakuin Women's University, C202 lecture room

Keynote speaker: Mrs Carina Wällstedt-Johannsson (Pedagogista of Helsingborg Pedagogical Center in Sweden)

Interpreter: Kazuhiko Kawasaki (Emeritus professor of Tokai University)

Moderator: Kazuki Nishiura (Professor of Miyagi Gakuin Women's University)

Slide 3, sidan 3

Det finns uttalade mål i läroplanen för förskolan i Sverige som reviderades 2018. Det står att förskolan ska arbeta för en hållbar utveckling och barnen ska få lära sig att de val man gör i vardagen kan påverka mot en hållbar utveckling. Den 1 januari 2020 blir barnkonventionen lag i Sverige. Barn har rätt att vara delaktiga i frågor som rör deras framtid. Det är viktigt vilka attityder och beteenden barn får lära sig under uppväxten, eftersom det kommer att påverka mänsklighetens möjligheter att skapa en bättre värld.

I läroplanen för förskolan står...

Förskolan ska spegla de värden och rättigheter som uttrycks i FN:s konvention om barnets rättigheter (barnkonventionen). Utbildningen ska därför utgå från vad som bedöms vara barnets bästa, att barn har rätt till delaktighet och inflytande och att barnen ska få kännedom om sina rättigheter.

Hållbar utveckling samt hälsa och välbefinnande

En positiv framtidstro ska prägla utbildningen. Utbildningen ska ge barnen möjlighet att tillägna sig ett ekologiskt och varsamt förhållningssätt till sin omgivande miljö och till natur och samhälle. Barnen ska också ges möjlighet att utveckla kunskaper om hur de olika val som människor gör kan bidra till en hållbar utveckling – såväl ekonomisk och social som miljömässig.

Slide 4, sidan 4 bara bilden

Slide 5, sidan 5

Fram till 2030 har FN satt upp 17 globala mål som rör bland annat människors hälsa, tillgång till utbildning och sociala trygghetssystem, migration, klimatförändringar och behovet av samverkan mellan alla olika sektorer i samhället.

Dessa mål har vi även med oss i arbetet tillsammans med barnen i förskolan.

Slide 6, sidan 6

Vuxenvärlden behöver ge barnen möjlighet att utveckla handlingskompetens, säger Ingrid Engdahl. För pedagogerna i förskolan är det viktigt att visa på möjligheter till förändring i vardagen.

Slide 7, sidan 7

Hållbar framtid genom påhittighet och handlingskraft

Enligt styrdokumentet för förskola och skola ska utbildning och undervisning kännetecknas av demokrati, förbindelser och sammanhang - viktiga ledstjärnor i projektet Hållbar framtid som Reggio Emilia institutet i Sverige startade redan 2016.

Projektet kännetecknas också av ett kooperativt och kreativt lärande om ekologisk, social och ekonomisk hållbarhet. Detta ställningstagande innefattar värnandet om människans ekologiska känslighet, det vill säga den inneboende förmågan vi har att känna empati, förbinda och skapa sammanhang mellan allt i naturen. Vi tror inte på människan och naturen utan

människan är en del av naturen. Begreppet Ekologisk känslighet är hämtat från Reggio Emilias kommunala förskolor i Italien

Ett nationellt och flera regionala nätverk som engagerat många pedagoger runt om i Sverige och påverkat deras arbete tillsammans med barnen kring hållbar utveckling. 2016-2019 har ca 2000 pedagoger runt om i landet varit med i detta nätverk.

Slide 8, sidan 8

Enligt Stefan Edman, biolog och författare börjar allt med förundran och det sätter igång ens nyfikenhet. Då vill vi veta mer och lära oss mer.

Slide 9, sidan 9

Reggio Emilia Institutet vill genom projektet Hållbar Framtid bidra till att förskolor och skolor blir platser som genomsyras av hoppfullhet, påhittighet och handlingskraft inom hållbarhetsfrågor, där barns och ungas hypoteser, undersökande och agerande ges stor plats. Arbetssättet ska präglas av lyssnande, utforskande och långsamhet samt drivs av vilja, mod och lust, för att understödja människors ansvarstagande och deras möjlighet att få och sprida framtidstro

Helsingborgs stads skolor har på olika sätt arbetat med hållbar utveckling och jag kommer att berätta om några av dessa projekt från våra förskolor samt projektet ” Matsmart.”

Slide 10, sidan 10 bara bilden

Slide 11, sidan 11

Hållbar framtid utvecklas till rubriken:” Hållbar framtid genom påhittighet och handlingskraft ”.

Tre områden där tanken är att dessa tre fokusområden ska vara ett stöd för alla regionala nätverk att möjliggöra fördjupning och tillsammans hitta fler dokumentationer / berättelser i sina nätverk.

Projektet Hållbar framtid ska:

- skapa förutsättningar för pedagogiska möten och dialoger kring frågor om Hållbar framtid genom det nationella nätverket och de regionala nätverken,
- sprida och delge nya berättelser om Hållbar framtid, såväl internationellt, som nationellt och regionalt,
- samarbeta med andra i samhället som också verkar för en Hållbar framtid genom att inspireras, lära av och utmana varandra till innovativa idéer och handlingskraft,
- identifiera och utveckla fördjupade processer kring hållbart tänkande i förskolor och skolor inom tre fokusområden.

Slide 12

Vi behöver utmana oss i att stanna upp och tillsammans med barnen ställa oss i nära relation med miljö, material och varandra. Se långsamheten, upprepning och tiden som en viktig aspekt i barns undersökande. Undersökandet och utforskandet behöver få slingra sig fram i barnets, elevens / gruppens egen takt.

Här möter barnen masken som de hittade förskolläraren Emmas koloni.

Slide 13, sidan 13

Lussebäckens förskola är en flerspråkig förskola med många olika modersmål. Filmen är från de två första månaderna och visar hur de arbetar för att lära känna varandra.

Barnen förstår inte alltid varandra verbalt men med hjälp av olika uttryck/estetiska språk så möta barn och pedagoger och skapar gemenskap och lär tillsammans.

Slide 14, sidan 14

Sven Persson, professor vid Malmö universitet säger att ett expanderat lärande innebär att vi kan

överföra en kunskap till en ny situation. Det får barnen möjlighet att göra här både i användandet av tekniker och i deras sociala samspel.

Ett projekt kring fåglar tar återigen fart med barnens sommaruppgift som var att ta med ett foto av en fågel de mött under sommaren.

När barnen går på promenad uppmärksammar barnen fåglar de känner igen och deras läten.

De berättar: ” En dag hör vi en fågel som sjunger. Ett barn säger: - Talgoxe! vi är lite osäkra på om det stämmer så vi tar upp vår telefon och lyssnar på Talgoxen i en app som heter Kwitter. När vi spelar upp talgoxens ljud i vår telefon låter det som talgoxen vi hört svarar. När vi sen stänger av telefonen för att gå vidare tystnar också den riktiga talgoxen. Vi provar att sätta igång den igen och då börjar talgoxen sjunga tillsammans. Talgoxen flyger upp och sätter sig i trädet precis ovanför oss. På torsdagen möter vi en talgoxe på samma sätt på vår gård. Den kommer nära och vi kan verkligen se hur den ser ut. Här hjälper ett digitalt verktyg oss att forska kring fåglarna på ett nytt sätt. Här startar ett stort intresse för talgoxen. Vi har också turen att kunna följa upp barnens tankar med en livesändning från ett talgoxebo. Där kan vi se sen hona som ruvar på sina 7 ägg och följa när de kläckts och hur de matas och växer. De tankar och erfarenheter barnen har befasts.

Till förskolans dag får vi i uppdrag att skapa en väska som visar vad vi arbetat med under året. Vi knyter samman projektet och året i väskan och fyller den tillsammans med skapande, odling, vindsnurror, qr-koder, fåglar och barnens ugglesaga.

Väskan ställs ut på torget i området och blir till en offentlig utställning där barnens röster får ta plats i det offentliga rummet på detta sätt.

Slide 15, sidan 15

St. Jörgens 4 förskolor har gemensamt tema vilket 2018 var ” Barns rätt till en hållbar framtid.”

Nu ska ni få ta del av deras resa. Hur pedagogerna

Emma Lewis, Marie Winck och Filippa Hallengren tillsammans med 16 barn mellan 1-3,5 år på avdelningen Nallen på Nicandersgatans förskola i Helsingborg kommer ta plats i en koloniträdgård och hur de tillsammans arbetar för en hållbar framtid.

En hållbar framtid kan även vara möjligheten att följa en trädgård under ett år, att få lära sig klättra i träd, gräva efter maskar och plantera och känna gräset under sina fötter. Allt för en hållbar framtid fast på olika sätt, men hela tiden med en stor respekt för allt levande.

Slide 16, sidan 16

Det vi kan se lockar barnen under uppstarten är vatten, vi vet inte exakt vad som lockar med vatten, men det gör det. Kanske är det mest en lek och glädje av att faktiskt få hälla och ösa. För våra yngsta är det kanske första gången de får möta vatten på det här sättet. Vi beslutar oss att erbjuda barnen vatten på en annan plats, på stranden. Vi börjar gå till stranden med alla barn en gång i veckan med en tanke om att väl på stranden dela oss i mindre grupper. Ganska tidigt ser vi att det är svårt att möta barnen i mindre grupper. Det är inte alltid lätt att möta barnet nere vid vattenbrynet, som är nyfiken på snäckorna och tången samtidigt som den yngsta kompiserna precis lärt sig krypa upp för en liten backe och är nyfiken på att krypa vidare ut på vägen

Helsingborg är backigt minst sagt och backen tillbaks till förskolan är lång och tung, barnen är hungriga, trötta och vid vissa tillfällen kalla.

Slide 17, sidan 17

Vi ser att stranden är en spännande plats att utforska kopplat till vårt tema Barns rätt till en hållbar framtid...men, vi är oerhört nyfikna på att prova en till plats, Emmas koloniträdgård. ”Tänk om vi kunnat följa min trädgård under ett helt år”. Vi tänkte det kunde vara ett så konkret sätt för små barn att få undersöka växter, djur, insekter, få en förståelse för

kretsloppet och människans påverkan på naturen, men också att få ta plats och få möta andra människor, främst den äldre generationen... Vi kan också berätta att nästan alla våra barn bor i lägenhet utan trädgård. Inledningsvis trodde vi att det var för långt för barnen att gå men det gick faktiskt ganska fort. Dessutom var det ingen backe på väg tillbaks till förskolan!

Ungefär så här kan det se ut när vi kommer till kolonin.

Slide 18, sidan 18

Första besöket på kolonin är spännande. Vi upplever att alla barn är upptagna med att undersöka och upptäcka på olika sätt. Genom att promenera runt och titta, gå in och ut ur stugan, gräva i jorden och leta efter maskar, plocka blommor och stora rötter som vi tar med till förskolan för att undersöka vidare. Vi planterar också blomlökar av olika slag. Hela tiden med en lite frågande blick mot Marie "kan man plantera dessa nu Marie?"

Att leta efter maskar var det som attraherade flest barn. Det var spännande, intressant och lite äckligt på samma gång.

Deras möte med stugan är också fint. Roligt att se små barn gå in i en liten stuga.

Vi ser att vi kommer kunna bjuda in till små möten inne i stugan och samtidigt fortsätta upptäcka trädgården och övriga koloniområdet.

Slide 19, sidan 19

Möte med en blomma, papper och penna.

Slide 20, sidan 20

När barnen gräver upp maskar för fullt börjar ett barn bära bort maskarna till ett äppelträd, han placerar ut maskarna på trädet och säger att det är ett maskträd. Efter detta tillfälle har trädet alltid kallats just Maskträdet.

Pedagogerna ser barnens nyfikenhet, möjligheter

att utmana och utveckla projektet. De bestämmer sig ganska snabbt för att släppa stranden och välja kolonin

Familjerna kommer med positiv feedback och verkar mycket positiva över valet av att skapa en relation till kolonin.

Slide 21, sidan 21

Vi upptäcker en ny plats vid koloniområdet som barnen uppmärksammar på vägen dit.

-Titta ett slott!

-Pappa och jag såg en borg.

Detta blir en plats vi besöker på väg tillbaks till förskolan varje gång. En plats där vi främst fantiserar kring vem som bor i slottet och varför de aldrig öppnar dörren. Vi utmanar även oss själva motorisk, klättrar upp för trappan eller backen och ner igen på olika sätt.

Slide 22, sidan 22

Efter ett par besök till kolonin vill vi utmana oss själva och bjuda in barnen till flera språk och flera sätt att reflektera. Därför låter vi våra äldsta barn gå till kolonin med en fasttejp iPad i vagnen för att kunna filma hela vägen dit. Detta för att vi på förskolan ska kunna resa till kolonin flera gånger, vi öppnar upp till olika sätt att resa och olika sätt att besöka kolonin. Bra inför en kall vinter som är på väg.

Slide 23, sidan 23

Väl framme möts de av en frusen koloni och frågan uppstår "Men vad händer med maskarna? De kan inte komma upp till sin mamma och pappa!" .

Slide 24, sidan 24

Vi erbjuder barnen reflektion genom Green Screen och filmen som de äldsta barnen filmat på vägen till kolonin. Med hjälp av tekniken och vår fantasi reser vi tillsammans genom filmen/projektionen i

mindre grupper till kolonin. Barnen utforskar rummet, filmen, projektionen, iPaden, stativet, varandra och det gröna tyget.

Slide 25, sidan 25 bara bilden

Slide 26, sidan 26

Tre barn vill klättra upp i maskträdet. Vi drar fram en hylla och lite stolar. Vi täcker möblerna med det gröna tyget och sätter igång med att klättra.

Slide 27, sidan 27

Nyfikenhetsfråga som är mer riktad till barnen och en till lärarna.

Världen förändras och vi behöver förändras med den. Därför behöver vi undersöka tillsammans med digitala verktyg i förskolan.

Digitaliteten erbjuder flera sätt att undersöka. Vi måste våga använda oss av dem utan att ibland veta hur. Även detta är Barnens rätt till en hållbar framtid- att möta modiga pedagoger.

Slide 28, sidan 28

Känns naturligt att vi gör fågelmat i ett led att få vår koloni mat, det är en väldigt kall vinter och det kan vara svårt för våra vänner att hitta mat.

Slide 29, sidan 29

Barnen fortsätter att hjälpa maskarna i kylan.

Slide 30, sidan 30

Slide 31, sidan 31

Vi går in i en mycket kall period, riktigt kall. Vi kan inte besöka kolonin på ett par veckor pga av kylan. Barnen har visat en oro för fåglarna och jag blir inspirerad av "Att ge Form åt förskolans innehåll" Hege Hansson skriver om utomhusgalleriet där konstnären Ingerid Kuiters gett plats till 8 unika fågelhus och hur barnen på förskolan blir inspirerade. Jag

visar Filippa och Marie och vi erbjuder några barn att göra ritningar och såga brädor.

-De har inte kläder. De bor i fågelhus.

-Ska vi göra ett fågelhus Emma?

-Fågelhuset behöver ett hål så dom kan komma ut och in.

-Fåglarna är svarta, därför ska huset vara svart.

- Fåglarna behöver också en lampa. när det blir mörkt.

- Här är taket.

- Och lite mat i huset behöver dom.

Slide 32, sidan 32

Våra första fågelholkar är på plats och vi väntar och längtar tills någon flyttar in...Fågelmataren vi gjort är mycket välbesökt, maskarna har kommit upp igen, förhoppningsvis har de återförenats med sin mamma och pappa. Vi är i full gång med att plantera och när vi väl ska sätta ner våra plantor i jorden är fågelkrämmorna redan fixade, de hänger just nu och glittrar i vår ateljé. Innan sommaren är det dags för familjerna att komma på besök.

Slide 33, sidan 33

I projektet SmartMat Hbg satsar Helsingborgs stad på att minska matsvinnet och samtidigt öka andelen grönt i kommunens skolmåltider. Måltiderna ska också kopplas till undervisningen och användas som pedagogiskt verktyg.

Bibliography

Edman Stefan: Lecture about sustainable future in Gothenburg, Sweden 2017 arranged by Reggio Emilia institute project "Sustainable future"

Engdahl Ingrid: Article 2019-08-22 "Förskolan bidrar till ett hållbart samhälle" Pedagog Göteborg <https://pedagog.goteborg.se/artikel/forskolan-bidrar-till-ett-hallbart-samhalle/>

Lusbeckens preschool, Helsingborg Sweden: Film "Follow us through children's exploring and learning". Filmmak-

er: Susanne Andersson

Nicandergatans preschool, Helsingborg Sweden: “The Rights of children to a sustainable future.” – Emma Lewis, ateljerista

Reggio Emilia institute in Sweden - Sustainable future, a newly-started project 2016 about sustainability issues in preschools and schools. www.reggioemilia.se

Ringstorps preschool, Helsingborg Sweden: “Sustainable future with focus on nature and animals at Ringstorps preschools”.

Skolverket, Sweden: Curriculum for Preschool 2018 • Vecchi Veà: Ateljerista in the Reggio Children approach, Italy

